

## 山尾三省の農業詩と陶淵明

加藤 國安

(漢文学・中国事情研究室)

### はじめに

レイチェル・カーソンの名著『沈黙の春』<sup>1)</sup>に、こんな一節がある。

いまこの地上にいびいている生命がなくなり出されるまで、何億年という長い時がすぎ去っている。発展、進化、分化の長い段階を通じて、生命はやつと環境に適合し、均衡を保てるようになった。環境があつてこそ生命は維持されるが、環境はまたおそろしいものだったのだ。たとえば、場所によつては、危険な放射能を出す岩石があつた。すべての生命のエネルギー源である太陽光線にも、短波放射線がひそんでいて、生命をきずつけたのだ。時をかけて——それも何年とかいう短い時間ではなく何千年という時をかけて、生命は環境に適合し、そこに生命と環境の均衡ができてきた。時こそ、欠くことのできない構成要素なのだ。それなのに、私たちの生

きる現代からは、時そのものが消えうせてしまった。

(第二章「負担は耐えねばならぬ」)

カーソンのこの一節に読み至った時、「時そのものが消えうせてしまった」現代にあつて、悠久の自然と深く関わる山水詩や隱棲詩などの豊富な遺産を有する中国古典詩は、なすすべもなく忘れ去られていくのだろうかと反問した。中国の古典詩には、戦争や権力闘争などにより、自己の幸福な生活への願いを断ち切られることを拒み、人間と環境がほどよい均衡を保ちながら自足できる生き方を追求した作品がじつに多い。その実践者は数限りなく存在するが、代表的詩人は何といつても陶淵明である。

陶淵明は、東晋王朝が腐敗していく中、何度か官吏をなげうつてその度に郷里に帰り、農耕に従事しながら詩賦を書いて一生を終えた人物だ。彼はいう、「天地は長えに没せず、山川は改まる時無し」(「形、影に贈る」と)。大地という不変的存在に安住の拠り所を見出した陶淵明の詩句は、農作業の辛苦の中にも、安心立命の世界を手に入れた喜びであ

ふれている。また自らの生涯を要約して述べたものに、「勤めては労を余すこと靡く、心に常閑有り。天を楽しみ分に委ね、以て百年に至る」〔自ら祭る文〕なる句がある。彼のこの超然とした清新な精神が、その後の中国文人の一つの理想境となつていった。中国古典詩を貫いて流れる悠久の時の充溢も、豊かな実りや柔和な安らぎをもたらす大地・自然があつてこそである。しかし、その大地・自然が今きわめて危ういものとなりつつあり、陶淵明をはじめ中国の詩人たちが倦むことなく描き続けた「常閑」なる安息の詩学は、その基盤から崩壊しかけている感がある。

中国の古典詩を読むと、万古変わらぬ悠久の営みへのゆつたりとした息づかいが感じられるのだが、それを今日、どのように受けとめればいいのか。筆者自身かなり長い間、この問題を重いテーマとして抱え続けてきたが、最近、ある時、山尾三省の詩集『びろう葉帽子の下で』という本を手にし、彼の詩を読み進めていくうちに、この問題に対する考え方の上で一つの示唆があると思つた。以下、この点について述べてみたい。

## 一 山尾三省の農業詩

山尾三省（一九三八〜現在）は、東京に生まれ育ち、早稲田大文学部西洋哲学科を中退し、諸活動や仕事に携わつたのちに、一九七七年、三九歳の時に家族とともに屋久島へ移り住んだ。以来、農業をやるかたわら詩を書いたり、宮沢賢治の研究などを続けてきた。

山尾三省が屋久島を選んだ理由について、彼自身こう語っている。

屋久島の山中には樹齢七千年を越す、聖なる老人、縄文杉と呼ば

れる杉が生えていること、ただ百姓をやるというだけでなく、その老人の息吹を身近に感じながら百姓をやることに希望を見いだしている…。

聖老人の住む屋久島は、私の内側では人間性の故郷としての輝きを持っていた。： （『聖老人』九二〜九三頁）

その後の屋久島の開墾はきわめて厳しいものだった。「土中にはあらゆる種類の植物の根が入り混じり、一掘り一掘り開墾の鍬にからみつく。からみついた根を力で引き抜くにはあまりにも体力を消耗するので、傍らに常に鎌を用意しておき、切り取つて畦に投げる。開墾が進むにつれて、畦には一列に切り取られた太根や細根の山が出来上がる」（同前 九四頁）と、その様子を記している。こうした農作業との格闘を通して、彼の詩は書き続けられていった。

三省の詩に、「畑」と題した連作詩六首がある（詩集『びろう葉帽子の下で』一五九〜六五頁 以下「詩集」と略す）。

「畑」 その一

海を見下ろす広い畑で

午後の間じゅう あなたはゆつくりと鍬を振つていた

海を見下ろす広い畑で あなたはゆつたりとしていた

海と空と

太陽と土 そして鍬が

あなたをゆつたりとさせ 幸福にさせることに

あなたは真に気づきはじめていた

「畑」 その四

海を見下ろす広い畑で

午後の間じゅう あなたはゆつくりと鍬を振っていた

そして夕方 空を見上げると

空いちめんに懐かしい綿雲が流れていた

(中略…)

あなたはその下で ゆつくりと鍬を振っていた

あなたは幸福で

幸福は鍬にあることを 知りはじめていた

この詩で繰り返されるへゆつたりとした時の流れが、現代文明の喪失したものであることは言うまでもない。「太陽と土 そして鍬」が、そうした貴重な時の流れをもたらす源なのだと、三省はいう。今、己の全身の運動神経と筋肉が均衡を保ちながら、一振り一振りの鍬の動作を支えているのだと実感するとき、鍬を握る手は喜びでもって軽やかなものとなる。少しずつ鋤かれていくわずかばかりの土を確かめつつ、彼は一歩ずつ進んでいく。時に腰を伸ばしたり、空を仰いだりしながら、また鍬を振り上げる、その繰り返し。耕耘機やトラクターを用いられはあつたという間に終わる農作業を、彼はあえてこの単調かつ簡単にははかどらない素朴な労働を続けるのだ。これが、彼の心に不思議な充実をもたらす。

夕方の空には、「懐かしい綿雲が流れていた」。彼はその下で思う、「あなたは幸福で／幸福は鍬にある」と。「あなた」は、自己を二人称化したもので、三省自身のこと。夕方になり彼の体は、あちこち軋みはじめていただろう。しだいにペースも落ち、おのずと休息を必要とするようになっていた。そんなとき、ふと夕空の雲を見ると、「空いちめんに懐かしい綿雲が流れていた」。それを見て、彼は子供の時にどこかで

見たような気がした。それは生きる喜びを実感し、未来を夢見ていた頃の彼の童心や郷愁をさそう、原風景の一つだっただろう。今、自分の胸の中をあつ頃の幸福な雲がのんびりと去来していく、そう感じられたのではないか。この優しくして心を和ませる「綿雲」に、彼はしみじみとした「幸福」感を覚えるのだった。

こうした三省の詩を読むと、すぐ陶淵明の「癸卯の歳、始春 田舎に懐古す」詩の、

秉耒歛時務 耒を乗りては 時務を歛び

解顔勸農人 顔を解はせては 農人に勸む

の二句が想起される。都市での暮らしを捨てて、三九歳で帰農の道を選んだ三省の詩は、四一歳頃田園に帰った陶淵明の詩の世界に通ずる。中国詩歌の一つの真髓を、あたかもそのまま実践するような詩人が、現代の日本に在るといえるのは一つの驚きである。近代以来の日本の農業詩は辛苦を詠むのがほとんどで、肯定的に賛美するというのはきわめて稀だからである。しかし、三省はその辛苦を身にしみて感じながらも、従来 of 農業詩とは性格の異なる農民・農村像を、つまり「人間性の故郷」という根源的な生き方にまで遡及した価値観を、そこに見いだしている。彼の詩を読むと、現代から失われた「時」の充溢を、彼が「鍬」を通してしっかりと感じ取っていることが分かる。その生き生きとした心の張りには、干上がった大地に水がそそぎこまれ、緑が劇的に回復するような新鮮味がある。そうした三省の稀有な詩は、現代文明下の閉塞性に異を唱え、遠隔の島で農業を営む日々を源泉として生まれているのである。

「鎌」(『詩集』七五―七六頁)  
いつのまにか鎌は

私のもうひとつの手になった  
鎌を持ち野良に立つと

私の内に静かな喜びが流れる  
それは多分 初めて道具を使うことを知った

原初の人間の誇りにも通じる  
手応えの確かな 奥の深い喜びである

私の鎌は  
部厚い背をもったがつしりしたナタ鎌である

この鎌で草も刈れば木の枝も伐り払う  
鎌で払えば 道は自然にそこにできている

そこは藪でありながら  
もう人間の歩むことのできる道である

しかも鎌は あの厄介なガソリンのように  
見る見る内に減ってゆくということがない

砥石で丹念に研げば  
朝の光のようにさわやかな切れ味となり

常に真新しい  
鎌を持って野に立つ時

二河白道の真中を渡ってゆく人のような  
確かな歩みが私の中にある

鎌を持って野良に立つと  
私の内に 人間の 静かな喜びが流れる

この詩では、鋏が鎌になる。「鎌を持ち野良に立つと」、私は「手応え

の確かな 奥の深い喜び」を感じる。「奥の深い喜び」とは何か。「初めて道具を使うことを知った／原初の人間の誇りにも通じる」ものだと彼はいう。未開の地にはじめて乗り出す微力な人間の胸のうちを襲う、不安な思い。しかし、それはまもなくこのすぐれ物により次々に開拓されていき、みるみるうちに驚きと歓喜へと変わっていく。鎌一丁で、鬱蒼たる藪は見通しがよくなり、道もできる。三省がこの鎌を、「私のもうひとつの手」と呼ぶように、それはまさに最初に道具というものを使つた人類の驚喜までじかに伝わってくるような、根源的な感慨を含んだものなのである。

また三省はいう、もし草刈り機を使えば、ガソリンはどんどん無くなっていく。しかし、手の延長たる鎌は、「砥石で丹念に研げば」また元の真新しさを取り戻すと。かくて、彼はいつでもその手に不変の時を取り戻すことができるのだ。ある意味では、草刈り機よりも、鎌の方が働く手応えや喜びをより率直に伝えられるし、また自分が自分であることの誇りを強く感じさせてもくれ、さらには確かな時の歩みを己が生の証として刻んでいるという満足感も得られる。この彼の「鎌」の感慨は、自己の今の状況をかなり深く掘り下げていつて感得された実感だったといえる。それが彼に、揺るぎない安心立命の境地を運んできてくれるのだ。してみると、彼の鎌はただの鎌ではない。それは、現代文明により剥奪された人間本来の生命的時間や本質的尊厳を、改めて個々の手に豊かに実感させてくれる、幸福の道具でもあることを示している。彼のこの認識は、現代文明の暮らしの習性により錆びついた我々の脳に、快い痛撃を食らわせる。

また同様の詩に、次のような作がある。

「ナバ山で」〔詩集〕一七六―七頁

ナバ山のスモモの幼木の畑で

午後の間じゅう草を刈った

背丈よりも高いすすきやシダや茨の藪を

ざつくざつくと伐り払っていった

鎌はよく切れ

鎌を使うこと自体が喜びであった

あなたは三日前に右足のアキレス腱をちがえて

びっこを引き 茨の藪では無数の棘がささって

手の甲からたくさん血が噴き出していたが

それらのことは少しもあなたの喜びを妨げなかった

そこには静かな山があり

スモモの樹の幼木があった

あなたの手には

手に等しいほど敏捷な鎌が握られており

あなたは原初の人間であった

あなたは原初の人間であることに満足で

その時にはじめて

あなたがあなた自身になるのであった

ナバ山の畑で

午後の間じゅう草を刈っていた

そこには人影はまったくなくて

ただ山々だけが 深々と連なっていた

開墾中、右足のアキレス腱を痛めてびっこを引き、また茨の藪で無数の棘がささり、手から血が噴き出していたが、それでも喜びがあった。

自分が「原初の人間」のように土地を開墾し、そういう農業を通して自分自身を実感できたという気持ちだが、痛みさえ忘れさせたのである。ここでいう「原初の人間」とは、素朴な農業を行っていた時代の原始的にして初期の人間という意味よりも、むしろこれが人間の原点に立ち返った本来の生き方なのだ、という確信に満ちた響きの方をしっかりと受けとめなければならぬ。屋久島で農耕の日々を開始した三省は、まさに「人間性の故郷」というべき地と遭遇し得たことを強く実感したのである。

## 二 陶淵明の農作業を喜ぶ詩

では、中国詩の典型たる陶淵明の農業詩について見てみよう。陶淵明には農業に関する表現が多いように思われているが、じつは断句が少なくない。その中である程度まとまった農作業を記した作品の一つが、前述の「癸卯の歳、始春、田舎に懐古す 二首」其二である。陶淵明の田園への隠棲は、ある日突然決心されたものではなく、その前段階というのがあった。三七歳の時、母の逝去にあり、喪に服するため田舎に帰るが、この時に長年の夢だった田園の暮らしがようやく実現できたという喜びを、すでにこう語っている。

スキ持つ手も	軽やかに	秉耒飲時務
日々の仕事の	楽しくて	解顔勸農人
顔もニツコリ	ほころんで	
百姓らに	声かけては	耒を乗りては
ともに精出し	汗流す	時務を飲む
		顔を解ばせては
		農人に勧む

これは、もう農業が楽しくてしょうがないといった口ぶりだ。知識人が農民の間にまじって、スキヤクワを手に野良仕事をするというのは例がないではないが、それにしてもそれをこんなに楽しげに歌うというのは、ほとんど例がない。当時の東晋王朝とうしんというのは、権謀術数の渦巻く人間不信の時代だったから、役所での勤務もさぞや不毛の日々だったのだらう。それだけに陶淵明には、自分らしい生き方のできる農耕の暮らしに對して、格別の感慨があったのである。

そして、こんな思いとも出会う。

平疇交遠風

良苗亦懷新

広い田んぼに 吹きわたる風  
そのすがすがしさに 息をつき  
良い苗に 芽生えた新たな命  
そのういういしさに 目を細む

平疇へいちゆうに 遠風えんふう交わり  
良苗りやうびょうも 亦また新を懷く

畑を打つと、土が喜んで碎けていくようにさえ感じられたらう。当然、草木の命にそそぐ目も、おのずと清らかになってくる。さらに、陶淵明の農作業ぶりを覗いてみると、

はてさて 秋の収穫は  
どうなることか 分からぬけれど  
見る限りは 期待できそう  
今から 楽しみよ

雖未量歲功  
即時多所欣  
耕種有時息  
行者無間津

耕したり また植え付けしたり  
時にゃ ちよいと休んだり

未だ歲功を量らずと雖も  
即事 欣ぶ所多し

ここには 渡し場尋ねた  
孔子のようなお方は 通らぬわ  
耕し種え 時に息有るも  
行く者 津を問うこと無し  
農作業に励み、官界のことはさらさら頭にないという。これが田園詩人陶淵明が捉えた興趣の高さである。  
最後の四句はこう詠まれている。

夕日が落ちりや 仕事はもう止めて  
あとは みんなで連れ立って  
今日一日の 働きに満足し  
心豊かに 家路につくだけさ  
日人相与帰  
壺漿勞近隣  
長吟掩柴門  
聊為隴畝民

家に帰りや さあ とつくり傾け  
隣近所の人よ さあさ  
一緒に飲もう 疲れをとろう  
ついでに 詩を長々と  
節つけて うそぶいて  
ああ いい気分  
柴の門を 閉めようぞ  
このオレ様も  
いっぱしの農民になろうわい  
日入りて 相与あひとともに帰り  
壺漿こしやうもて 近隣きんりんを勞う  
長吟ちやうぎんして 柴門さいもんを掩おほざし  
聊ちやうか為ならん 隴畝ろうほの民に

夕日の落つる頃、畑で汗まみれに働いた人達が、スキとかクワとかを肩に担いで家路につく。こんな時の疲労感というのは、じつに心地よいものだ。その後は、酒壺をもち寄り隣近所集まっつての慰労会だ。知識人

だとか、農民だとかの分け隔てなく、お互いに農耕の話を交わしあつての親睦会である。それも田園に暮らす楽しみの一つといえる。そして、陶淵明は詩を長々とそぶいたりして、あとは柴の門を閉ざして休みにつく。こんな一日を過ごして、オレは一介の「隴畝の民」として暮らすのだという。

その数年後、陶淵明はついに意を決して郷里に帰ることになる。

「帰園田居五首」 園田の居に帰る

其二

種豆南山下 豆を種う 南山の下

草盛豆苗稀 草盛んにして 豆苗 稀なり

晨興理荒穢 晨に興きて 荒穢を理め

帶月荷鋤歸 月を帯び 鋤を荷いて帰る

道狹草木長 道狭くして 草木長し

夕露沾我衣 夕露 我が衣を濡す

衣沾不足惜 衣の濡うは 惜しむに足らず

但使願無違 但だ願いをして 違ふこと無からしめよ

陶淵明のふるさととは、現在の江西省九江市の南方にあつた。ここで、彼は一種の「理想の里」をみずから創り上げるのである。陶淵明は、それまでの役人生活を窮屈で仕様がな思つていただけに、今はのびのびとした気持ちで畑仕事に打ち込むことができるのを喜んだ。まず彼は南山のふもとに、豆を植えることにした（第一句）。どんな種類の豆かは知らないが、これでもって食糧の足しにしようというわけだ。種を蒔くときというのは、けっこう期待で胸がはずむものだ。目の前に、たくさんの収穫物が山積みされる光景を思い浮かべて、ニッコリほほ笑んでい

たかもしれない。

けれど、自然はそう生ぬるくはない。しばらくすると、雑草があちこちにはびこつて、豆の苗は少ししか育たないのだ（第二句）。これでは十分な収穫が得られないし、暮らしも成り立たないわけで、そこで陶淵明はこれではいかぬと発奮するのである。陶淵明は、早朝からおき出して野良仕事に精を出し、荒れている土地との格闘を開始する（第三句）。天から与えられたこの体を思いっきり動かして、まさに額に汗する肉体労働である。自分の食べるものは、自分で作る。これが、生きる基本なのだ。

陶淵明の野良仕事は、ときに暗くなるまで続いたようだ。これは、陶淵明の気持ちだが、決して中途半端なものではなかったことを物語っている。やがて、もう今日はこれくらいにしておこうと思つたのだろう。一日の労働をせいっぱいやつたぞ、という快い疲労感が湧いてくる。陶淵明は道具を片付け、家路につく。空には明るいお月様が上っていた。陶淵明は頭の上に月をいただきながら、また肩には鋤をかついで、満足げな足取りで帰ってくる（第四句）。こういう時というのは、さぞや明朗な気分なのだろう。まるで彼自身がお月様のように透明でくまがない。陶淵明は気分よく道を歩いていく。道は農道だったのか、狭かつたようだ。また、その辺に生えている草木も大きく育っていて、その葉っぱが陶淵明の服に触れるのだろう。葉には夕べの露がおりていて、歩くほどにどんどん服が濡れていく（第五六句）。こうなると、もう服の一部が体にひついたりしたかもしれない。ほやきも出たかもしれない。でも、田園の暮らしを実現して喜びに満ちる陶淵明は、こんなことなどでは全然めげない。すぐ気を取り直して、こう思うのである。「着物は濡れてもかまわん。どうつてことないわ。それよりも、オレの願いを台無しにしないでくれ」（第七八句）と。

政治が腐敗し王朝が揺らぐと、大地は永遠に変わらない。こうした陶淵明の農業詩は、大地への深い信頼感のもとに詠まれたものだった。その意味で、かなり牧歌的な情趣がたじろ。現代社会はそうした作品を、ますます牧歌的な夢のごときものとしてしか読めようがない状態にさせてしまった。陶詩の心を、確かな実感として捉えさせてくれる自然環境がますます衰弱しつつあるからだ。これは文学の危機であるという問題に止まらない。人間の生命・感性の衰滅さえもたらしかねない深刻な状況である。こうした閉塞的な中であって、山尾三省の詩は我々に一つの方向を示唆しよう。

### 三 山と向き合う心

田園に帰った陶淵明の代表的な詩に、有名な「飲酒」其五がある。その後半は、

採菊東籬下 菊を採る 東籬の下  
悠然見南山 悠然として 南山を見る  
山氣日夕佳 山氣 日夕佳なり  
飛鳥相与還 飛鳥 相与ともに還る  
此中有真意 此の中に 真意有り  
欲弁已忘言 弁弁んと欲して 已に言を忘る

といい、陶淵明の充実した気が、南山のようにどっしりとしているのが印象的だ。また日暮れ時、鳥がねぐらに帰るゆつたりとした光景も、平凡さの中に示される普遍的安らぎをよく捉えている。

陶淵明はまたこの種の光景について、

翼翼婦鳥 翼翼たる婦鳥  
馴林徘徊 林まに馴りて 徘徊す  
：  
日夕氣清 日夕 氣清く  
悠然其懷 悠然たり 其の懷おもい  
〔婦鳥〕

とも詠んでいる。詩人の魂と夕暮れの光景とが渾然と溶け合い、その根源的な体験が詩人の中で音楽のような流れとなり、そのまま詩のことは高められている。このような眺めを日々の暮らしの中に常住させたのが、陶淵明だった。

ところで、これと同種の意境を繰り返し詩に詠むのが、これまた山尾三省である。

「山」〔詩集〕五二頁  
夕方 何かに追われて 山に入った  
山で ひとかかえほどの椎の木を  
二本 伐り倒した  
向かいの山には まだ陽が当たっているが  
こちらの山は もう夕闇が濃い  
柔らかな山の土に 腰をおろして  
ゆつくりと煙草を吸った  
何故かこの時  
心の底から山が好きになった



山で椎の木を切り倒し、やっと一日のきびしい仕事を終えた頃、暗くなりだした山に向かつて腰を下ろし、「ゆつくりと煙草を吸う。紫煙の揺らぎの向こうに、どっしりとした山々がある。その時、何ともいえない充実感が湧いてくるのだった。この感慨は、畑仕事の時でも同じである。

「畑にて」その一（『詩集』二四八頁）

鋤を打つ手を休めて

山を眺める

こんもりと みっしりと繁った

名もない小さな緑色の山

その山の上を

二羽のどんびがゆつくりと舞い

いい声で啼いている

ああ とんびは

人間が働けば働くほど

いい声で啼くものだ

鋤を打つ手を休めて

山を眺める

こんもりと みっしりと繁った

緑濃い その山を眺める

その姿も静かである

：

畑仕事の一休みに、「山を眺める」。その上には、空を舞う鳶のゆつたりした姿と、「いい声」。思わず疲れを忘れる瞬間だ。そして、また「山

を眺める」。山は、たいして人に知られた山ではない。が、おのが存在の本質を開示したような泰然自若とした様で、そこに静かにある。詩人はそれをただ飽かず眺めるのだ。この時、陶淵明のいう「此の中に真意有り／弁ぜん」と欲して「已に言を忘る」と同種の感慨が、彼のうちにも把握されていたのではないか。

ただ彼の詩文中に、陶淵明に直接言及するものは見い出せない。老荘思想への言及はたびたび見られるから、彼が東洋の哲学を理解しているのは確かである。が、私はこの種の三省の詩を、中国古典詩や思想の日本文学への影響という、和漢の受容史の問題に帰するよりも、もっと今日の視点で理解した方がよいと思う。三省の詩は陶淵明の主題と一致する面があるけれども、しかし単なる陶淵明との類似の域を超えて、きわめて現代的な問題に深化していると思われる。ゆるやかな時を喪失する現代世界にあつて、あえて自ら農夫としての道を選び、現代の矛盾や軋轢などを見据えた独自の思想でもって、新たな意識の領域に鋤をふるっているのが三省の詩だ。陶淵明の詩は、不変世界への揺るぎない信頼に裏打ちされた牧歌的なものだが、三省のそれは、自然や大地―それに根を下ろす生き方の理念も含めて―そのものが失われていくことへの、反文明的哲学からのねばり強い提示として挑まれている。そこには老荘思想も絡んではいるが、日中間の受容史という狭い問題意識では収まりきれない、むしろずっと全人類的な生き方と深く関わっているものと思われる。

#### 四 自然の一瞬の深い開示

そうした日々の農耕との格闘の中から、三省はある瞬間訪れる自然の意味深い告示を感じ取ることがある。彼の詩を読むと、この種の自然の

奥深い開示は、当然ながらいつも捉えられるというものではなく、ある何かの「一瞬」にしか捉えられないものである。たとえば、無心に農作業をしていて体が次第に痛くなり、少し休もうと思つて何気なく顔を上げたとある時に、ふと見えてくるという体のものだった。

「一瞬」〔詩集〕一七二―二頁

海を見下ろす広い畑で

あなたは午後の間じゅう

ゆつくりと鋤を振つていた

:

あなたは一心に鋤を振つていた

あまり一心であつたので

太陽が背後の山に沈もうとしているのに

気づかなかつた

けれども刻は いつしか夕方であつた

詩の出だしは、いつもの畑仕事に精を出している様が描かれる。そして、気づかぬうちに日が暮れ、夕日が山の向こうに沈もうとしていた。彼は疲れた体を少し休めようとする。

ひと休みするべく枯草に座ると

あなたの腰はきりきりと痛んだ

あなたは枯草の上に横になり

山の向こうへ沈んでいく太陽を眩しく眺めた

太陽は沈んでいった

あなたは眼を閉じて 沈みゆく太陽に祈つた

そして眼を開いた一瞬

そこには 全く別の世界が展ひらかれていた

体を横たえて、静かに目を閉じ、何事かを祈る彼。そして、目を開けたその「一瞬」に、世界の意味深い開示は訪れた。

そこには 淋しさをむき出しにした青黒い山々があつた

青黒い山々は

神さびた莊嚴な淋しさとして 突然に現れたものとして

そこに在つた

その山々は 名もない島の山々であつたが

あなたがそれまでに見た

いかなる山よりも莊嚴な山であつた

山は「淋しさをむき出しに」していたが、彼はまたその中に「神さびた莊嚴」さを深く感じたのである。この体験は、ごく一瞬のうちに彼を撃ち、そして過ぎ去つていった。ただ彼にとつてこの瞬間とは、時の流れの中の孤立した一瞬ではない。むしろゆるやかな時の流れへの覚醒をはらんだモメントなのであり、精神の深い内省作用より発して、明るい閃光に照らし出された世界の本質をかいま見る邂逅の時なのだ。三省はこうも記す。

山々は私たち人間よりもはるか先に存在し、おそらく私たち人間よりもはるかな後まで存在しつづけるものであり、私たちを絶対的に超えた存在である。

〔聖老人〕「心の祭壇としての山々」

三省は何度となくこの種の崇敬の念に襲われたらしく、しばしば同種の感慨を詩につづっている。ある時には、この山の体験に加えて、「畑」や「土」の意味とも向きあうことがあった。

「静かさについて」〔詩集〕二五〇―二頁

この世でいちばん大切なものは

静かさ である

山に囲まれた小さな畑で

腰がきりきり痛くなるほど鍬を打ち

ときどきその腰を

緑濃い山に向けてぐうんと伸ばす

山の上には

小さな白雲が三つ ゆっくりと流れている

冒頭に、本詩の主題が静かに起こされ、ついでいつもの畑仕事ができ、一休みする彼の視線の遠くに、「小さな白雲」が見える。それをゆったりと眺めていると、心の奥から冒頭の主題が確信のように湧いてくるのである。

この世でいちばん大切なものは

静かさ である

山は 静かである

畑は 静かである

それで 生まれ故郷の東京を棄てて

百姓をやっている

彼は「山の静かさ」の大切さを確かめ、続けて自ら耕す「畑の静かさ」の意味を反芻する。だから俺は「生まれ故郷の東京を棄てて…百姓をやっている」のだと。そう思うと、さらに彼の中の静かさは、いつしか土そのものにもまで伸長していく。

これはひとつの意見ですけど

この世で いちばん大切なものは

静かさ である

山は 静かである

畑は 静かである

土は 静かである

稼ぎにならないのは 辛いけど

この世で いちばん大切なものは

静かさ である

三省にとつて、故郷の東京を棄てて屋久島に渡ったことは、出生地としての偶然な故郷で、現代文明に押し流されて生活するよりも、「この世で いちばん大切なもの」―、つまり世界の本质と人生の意味の探求のための住処に帰するためだった。そして、彼は心の奥で一瞬の真意との邂逅を重ねることで、たとえ貧しくとも他の何物とも代替できぬ深い喜びと慰めを得るのだった。

## おわりに

樹齢七千年の縄文杉（これを彼は、聖老人と称している）とともに生きていこうとする、屋久島の農民詩人山尾三省。現代社会が失った時の恵み

の大切さを、これほど真摯に受け止めるのに最適の土地もない。ここで彼は、農業の未来について、次のようにいう、

自然なしには、百姓はそれこそ何も出来ない。文明は百姓のこの謙虚さを搾取して、その糧で花を咲かせたが、百姓が謙虚さを弱さとしてではなくひとつの大きい徳の力と自覚した時には、農業は文明を支えるための基礎産業ではなくして、それ自身深い喜びをもたらず「もうひとつの文明」そのものとなるだろう。

〔聖老人〕「山羊の死んだ日」

農業文化は、「ひとつの大きい徳の力」をもつと捉える彼の言葉には、人類の根源的な安寧への自身の実践を踏まえた確信が込められている。

こうした独特の生を推し進める山尾三省について、評論家・真木悠介はこう述べる。

三省のめざす詩は、多くの現代詩人たちのめざす詩とは、ベクトルをもつように思う。…三省がめざしているものは、百姓でもあり詩人でもある、ということではない。百姓である、ということと、詩人である、ということが、ひとつのことであるような、そのような生。そのような呼吸。そのようなへ地のことばである。

〔自己への旅〕序―ことづて

真木の指摘は、三省詩のきわめて本質を突いている。三省の詩や文を讀むと、自らの生き方について、彼自身深い所で詩人兼農民とは考えていないことが理解できる。二つの仕事をしているという認識では、詩の

中の農作業のことばがどこか浮いてしまい、単なる「表現」となってしまう。それは三省の最も望まぬ所だろう。彼にとつて、両者はいつも一体なものであり、あくまで一つのものとして実践することで、自己の詩が「表現」に墮す矛盾を超越しようとしているのだ。三省の詩は、閉塞感の濃い矛盾だらけの現代社会の中で、自ら実践的農業に投じつつ人間の本質的な安寧を探求しようとするものであり、陶淵明文学の重要な本質―田園における農耕生活という人間本来の暮らしへの回帰―をある面で共有しつつ、さらに現代的な視点でそれを深化しており、混沌の世界に一つの道を切り開く可能性を示唆していよう。

三省は、現代社会をこう捉える。

絶えず過ぎ去った「過去」を作り出し、「未来」へと進んで行く現代文明の時間は、今、この地球自体を「過去」にして、宇宙空間に進出しようという段階に取りかかっている。すでに地球規模の未来は終り、未来は宇宙空間にある…。

宇宙空間へと直進する文明は、すでに核兵器の開発と原子力発電の開発によって、危機的状况にこの地球を追いこんでいる。種々の化学肥料は土を痩せ細らせ、農業と工場廃水その他は残留物質となつて生物体において年々その濃度を増している。…これらの傾向が少しも改まらないばかりか、年毎に悪い方向を深めて行くのは、私達が、時間は一方方向にのみしか進まないという「直進する時間」の神話、言葉を代えれば「進歩と繁栄」という神話を、時代の唯一の神話として、あらかじめ受け入れてしまっているからである。

〔自己への旅〕神話としての時間

では、この神話から解放されるにはどうすればよいのか。三省はこん

な詩を書いている、

「ゲンコツ花」〔詩集〕九九頁

ゲンコツ花が咲きはじめた

ゲンコツ花が咲きはじめる

多くのことが狂っていて

もうこのまま狂い切ってゆくのでは

ないかと感じられる世の中にあつて

ああ と思う

ああ やつぱり自然は巡っており

世界は生きているのだと思う

ゲンコツ花が咲くと

ここは懐かしい私の場であると思う

この「ゲンコツ花」というのは、和名はヒメヒオウギスイセンという野の花である。この花を見て、彼はこう思う。この社会は、時間的には直進して還ることのない時間に支配されているかのようだが、それに対し、共存するもうひとつの時間が流れていることもまた確かなことだと。それを三省は、「円環する時間」と呼ぶ。そして、

季節は、円環する時間の最も明らかな現われである。如何に直進する時間がこの社会を支配しようと、季節の巡りを留めることはできない。…季節々々の草木を眺め、風物を眺め、そこに一刻の詩心をとどめる時、人は直進する時間の桎梏から逃れて、ほっと一息呼吸することができるのである。

〔「自己への旅」神話としての時間〕

と述べる。「もうこのまま狂い切ってゆくのでは／＼ないかと感じられる世の中にあつて」、「円環する時間」をいかに豊かに感得し、満足のいく安息を手に入れられるかが、それぞれの「人間性の故郷」を見いだし実現する上での一つの鍵といえよう。

ところで、中国古典詩における山水詩や田園詩は、そうした「円環する時間」が濃密に覆う作品世界である。言い換えれば、自然が悠久で不変であることを核とした作品といえるが、それは現代社会の創作環境とは全く別種のもとで生まれたものだ。現代社会特有の難問を抱える今の世に、古典世界をそのまま因襲的に持ち込んでも意味はないが、自然環境の危機的衰弱は、古典世界には全くなかったものである。人類が古典世界で生きてきた時間はとてつもなく長い、我々が生きている現代というのはまだほんのわずかな期間でしかない。古典人にはそのままずっと未来も生き続けられるという確信をもっていたが、現代人にはそれは全くない。古典とは、悠久の時の流れを土壤にし豊かな環境にはぐくまれた、「水遠なる魂」と命名された文化の泉なのだ。古典をみずから捨てる者は、母なる大地を失いへ消えうせてしまった時」とともに、宇宙の無の闇に飛散するよりない。

今、人々は改めて強く「人間性の故郷」を欲している。その変わらざる時の流れと豊かな生命のうちに、おのが輝きをもって生き得ることを切望している。

注

- (1) レイチエル・カーソン『沈黙の春』（新潮文庫 一九七四）
- (2) 山尾三省『びろう葉帽子の下で』（野草社 一九八七）
- (3) 同右『聖老人』（野草社 一九八八）
- (4) これに関しては、別稿を用意している。
- (5) 山尾三省『自己への旅』（聖文社 一九八八）

（二〇〇〇年十月十九日受理）